

15. 瓢箪から駒

文豪というのは作家の中でも特に優れた作家を指します。近代の日本文学の中で文豪というとやはり夏目漱石でしょうか。漱石は、「坊ちゃん」「こころ」などの小説を書いた作者です。時代が江戸から明治に移ろうとしている時に、漱石は江戸で生まれました。両親が年をとってからの子供であったのと末っ子だったという理由で、1歳の頃養子に出されました。しかしながら、養父母が離婚したため8歳の時に夏目家に戻ります。その後、成績が優秀だった漱石は、一生懸命勉強して、東京帝国大学(現東京大学)の英文科に入学します。非常に優秀で大学の成績はいつもトップだったそうです。しかしながら、この頃から漱石を死ぬまで悩ませる神経衰弱が始まったらしいのです。幼児期の養子の経験や兄達の死などが漱石が神経衰弱になった理由だろうと言われています。

大学を卒業した漱石は、松山の中学校や熊本の高等学校の教師として英語を教えます。この頃、漱石は結婚しますが、妻は流産で精神的に不安定になり結婚生活はあまり上手くいかなかったようです。結婚生活はともかくとして、研究の面では**評価され***た漱石は、1900年に文部省から英語研究のためにイギリス留学を命じられます。せっかくイギリスに渡った漱石ですが、現地の物価は高く、国からの生活費では満足な生活は難しく、そのあげく成果をあげなければいけないというプレッシャーから漱石は再び神経衰弱になってしまいます。漱石は勉強どころではなくなり、日本に帰国するよりほかありませんでした。1903年に日本へ帰国後、漱石は大学で講師の仕事をしますが仕事は上手くいかず、**そのせいで****相変わらず神経衰弱もよくなりませんでした。そんな折り、親友に気晴らしに小説を書いたらどうかと勧められ、出来上がったのが「吾輩は猫である」という題名の小説です。1905年にこの小説が発表されて人気を得ると、漱石は「坊ちゃん」「草枕」と次々に小説を発表し、作家を職業にするようになります。「瓢箪から駒」という諺はこんなことを言うのでしょうか。

このように気晴らしから始まった作家活動ですが、漱石が作家として活躍したのは亡くなるまでのたったの10年ぐらいです。その短い活動期間にも関わらず、素晴らしい作品を多く残し、漱石は文豪と呼ばれるようになりました。英文学者として成功せず

に作家として成功するということは、おそらく漱石も考えていなかったでしょう。人生というのは本当に予想のつかないものだと思います。

単語リスト：

文豪（ぶんごう）Văn hào, nhà văn lỗi lạc	神経衰弱（しんけいすいじゃく）Suy nhược thần kinh
養子（ようし）Con nuôi	流産（りゅうざん）Sảy thai
夏目漱石（なつめそうせき）Natsume Souseki,	気晴らし（きばらし）Thoải mái, thanh thản
Nhà văn nổi tiếng của Nhật Bản	勧める（すすめる）Giới thiệu, khuyên
離婚（りこん）Ly hôn	諺（ことわざ）Tục ngữ
優秀（ゆうしゅう）Ưu tú	